

# 大学生における居場所（安心できる人）の 日台比較

○岡村 季光<sup>1</sup>・林 伯修<sup>2</sup>・朱 文增<sup>2</sup>・鍾 慧子<sup>3</sup>・  
陳 福士<sup>3</sup>・新井 一郎<sup>3</sup>・多根井 重晴<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>奈良学園大学・<sup>2</sup>国立臺灣師範大学・<sup>3</sup>日本薬科大学)

# 問題と目的

## 居場所の性差

- 日本の大学生で選択が多いのは自分・母親・友人の順。  
ただし、**男性**では**自分**を選択、**女性**は**母親**を選択することが多い。  
(岡村・豊田, 2002; 2004)
- 5段階評定でも**上述と同様の傾向**。  
(岡村・豊田, 2007)

## では、他国ではどうなのか？

- 他国との比較はこれまで発表者が調べた限り行われていない。
- 文化的な背景により安心できる人に差異がある可能性。
- 日本に比較的近く、かつ交流が深い台湾との比較を行い、2国間の比較を行う。

# 方法

## ● 調査対象者

- 日本の調査対象者  
近畿圏内に在住の大学生134名  
(男性61名, 女性73名)。  
平均年齢は20.95歳 ( $SD .50$ )
- 台湾の調査対象者  
台北市内の大学生92名  
(男性37名, 女性55名)。  
平均年齢は21.82歳 ( $SD 2.86$ )

## ● 調査内容:

### 居場所(安心できる人)調査

- “あなたは以下の人と居る時に安心できますか。ここで用いている「安心できる」とは、ホッとする, 落ち着く等という意味です。”という教示を行う。
- “自分ひとり” “父親” “母親”  
“きょうだい”  
“現学校以前の友人”  
“現学校以降の友人”  
“恋人” という場面を設定。

# 方法(続き)

## ●調査内容(続き)

- 台湾の調査では、日本語で示された教示文を台湾語に翻訳して実施。
- 日本在住と台湾在住のバイリンガルにそれぞれ翻訳を依頼。同一の文言であったものを採用。
- 両者で文言が異なった場合は、協議の上文言を修正。
- 日本の調査内容と比して十分な等質性が得られたことを確認。

## ●調査手続

- 倫理的配慮を行ったうえ、集団的に実施。
- 調査内容で示した各場面においてそれぞれ  
“5:非常に安心できる”から  
“1:あまり安心できない”の  
5件法で回答を求めた。

## ●調査時期

- 日本は2020年1月。
- 台湾は2020年6~7月。

# 結果

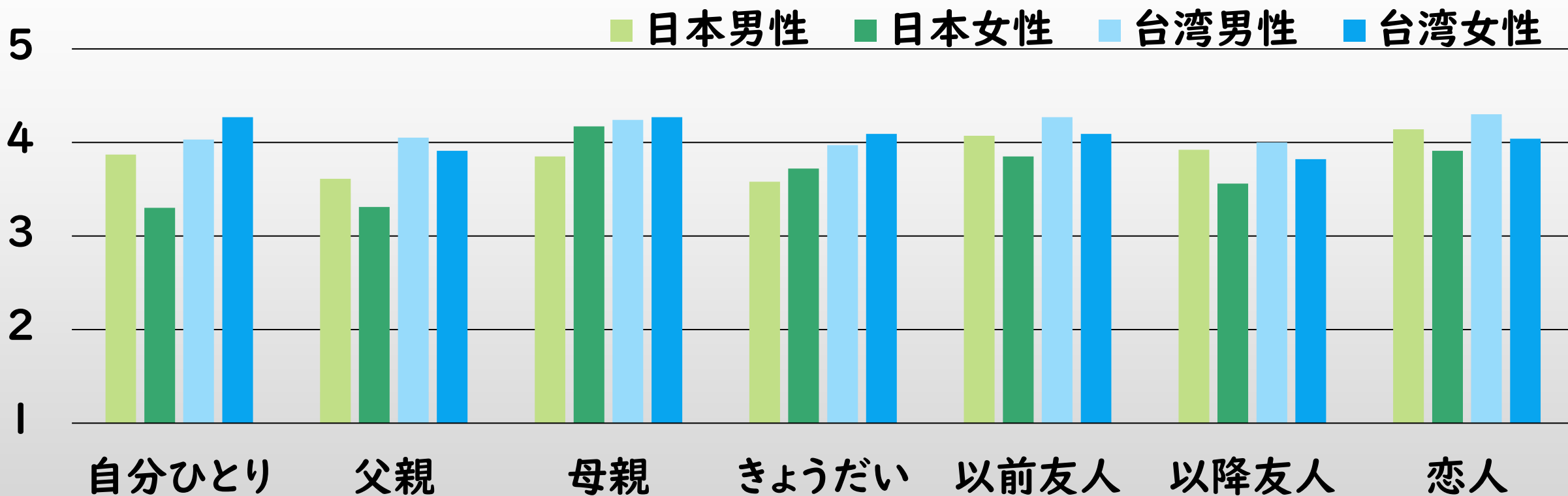
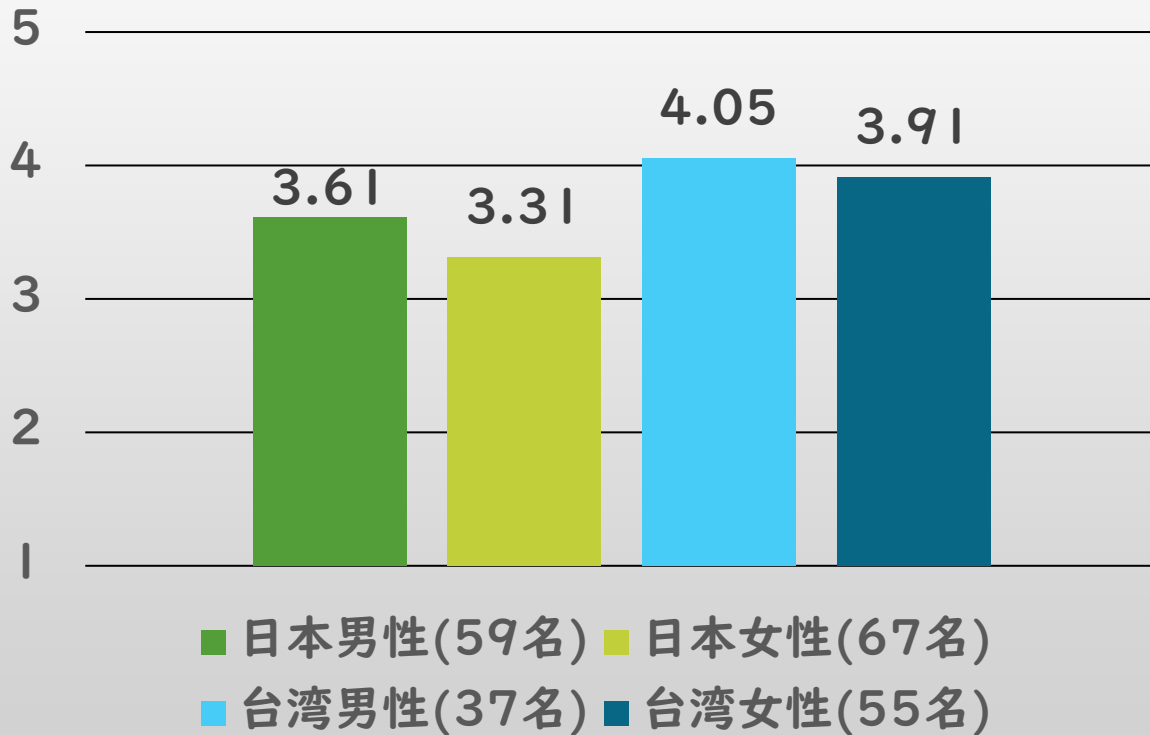


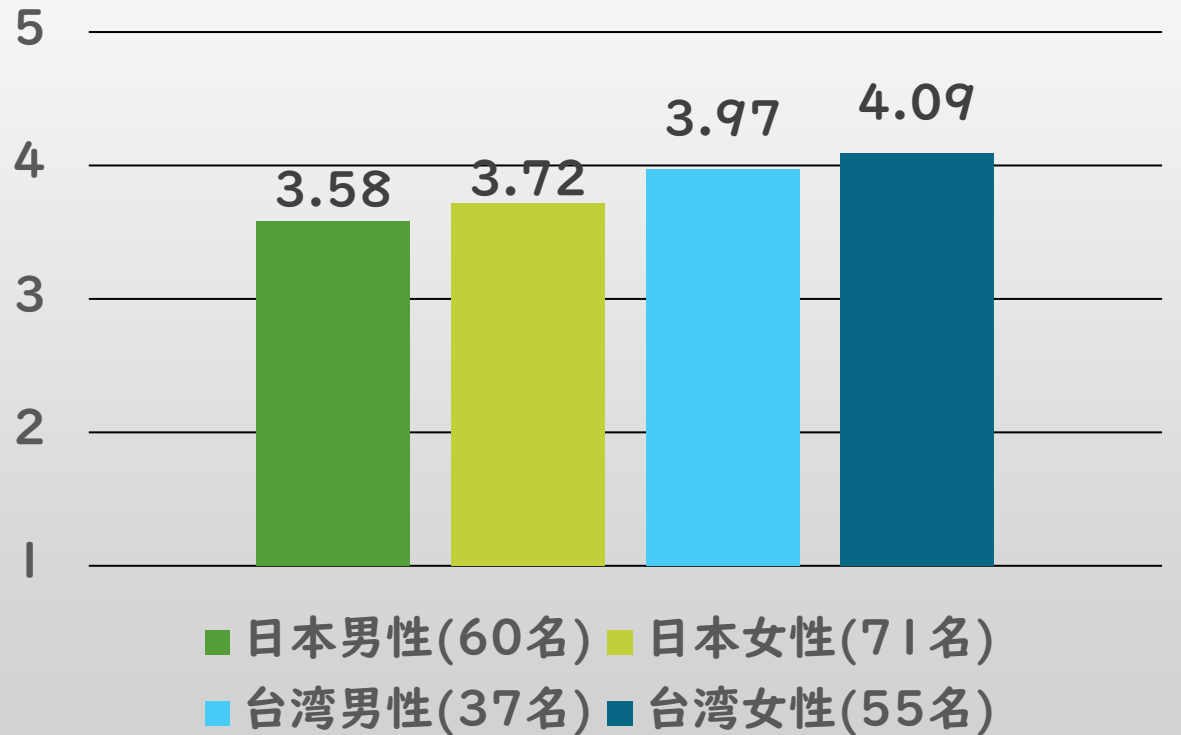
Figure 1 居場所 (安心できる人) の日台比較

# 場面別の検討 (国間主効果が有意)

父親 ( $F(1,214)=10.24, p=.002, \eta^2_p=.05$ )



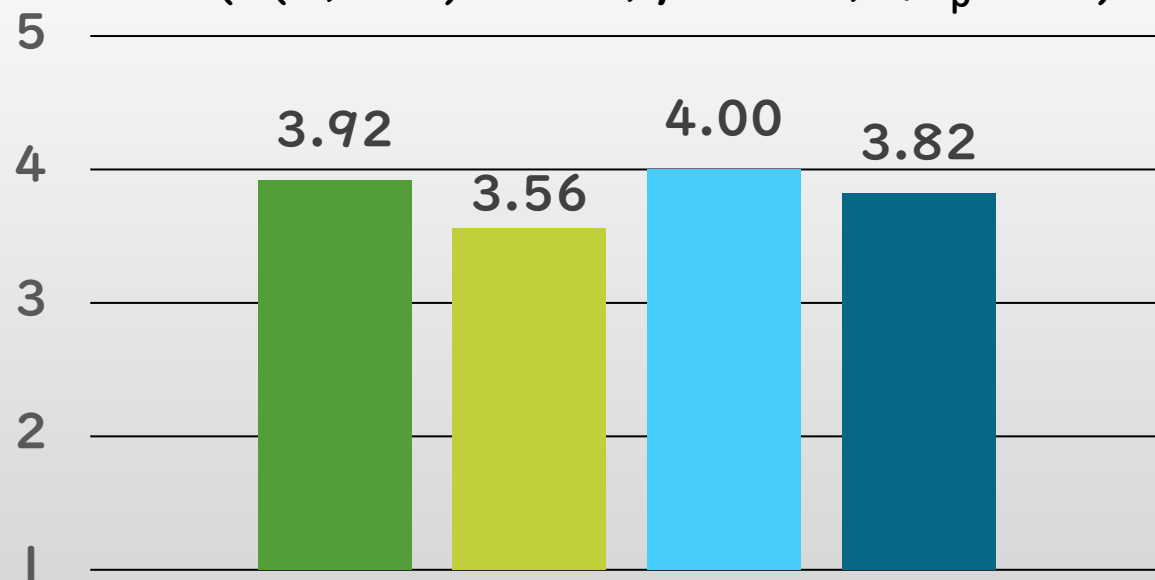
きょうだい ( $F(1,219)=6.48, p=.012, \eta^2_p=.03$ )



# 場面別の検討

## 現学校以降の友人 (性別間主効果が有意)

( $F(1,218)=3.99, p=.047, \eta^2_p=.02$ )

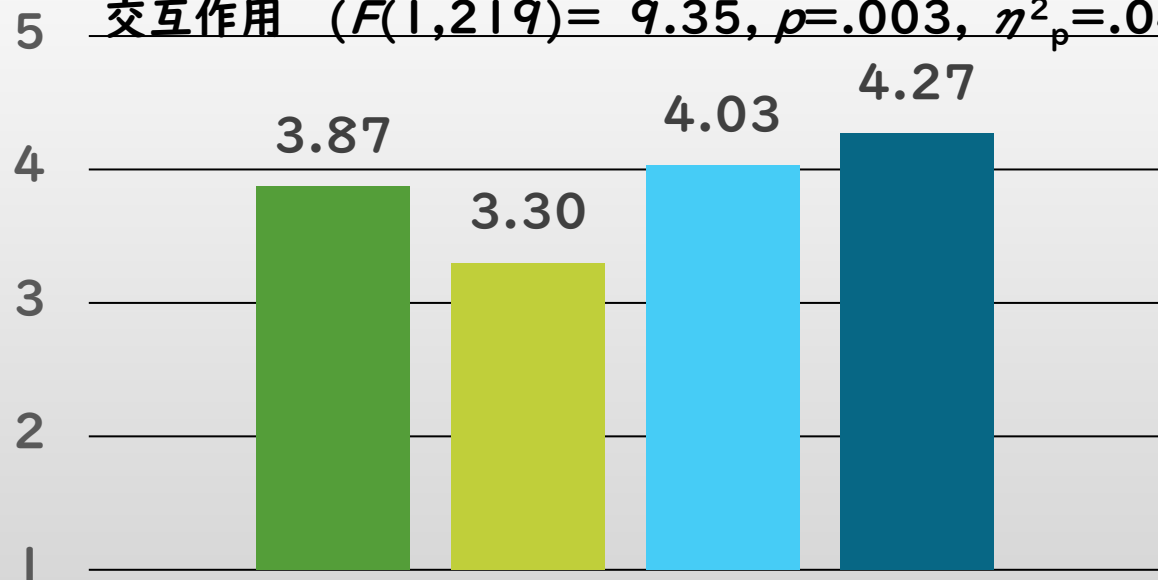


■ 日本男性(59名) ■ 日本女性(71名)  
■ 台湾男性(37名) ■ 台湾女性(55名)

## 自分ひとり (国間主効果・交互作用が有意)

国間主効果( $F(1,219)=18.14, p<.001, \eta^2_p=.08$ )

交互作用 ( $F(1,219)=9.35, p=.003, \eta^2_p=.04$ )



■ 日本男性(60名) ■ 日本女性(71名)  
■ 台湾男性(37名) ■ 台湾女性(55名)

# 考察

## ● 父親・きょうだい

いずれも安心できる人評定が  
日本<台湾であった。

→台湾における父権制，家族主義  
の特徴が色濃く反映。

## ● 自分ひとり

(女性のみ)安心できる人評定が  
日本<台湾であった。

→台湾の女性における独立志向が  
影響している可能性を示唆。

## ● 現学校以降の友人

安心できる人評定が  
男性>女性であった。

→新しい友人に対する安心感形成  
には性差がある？

※ただし，効果量は低いため，  
解釈には慎重を要する。